様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 １４ 日現在

機関番号：３７１１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１９７４

研究課題名（和文）民俗芸能の観光化にみるグローバル化と再ローカル化に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Globalization and Re-localization of the Drum Dance Eisaa and Tourism Inside and Outside Okinawa

研究代表者
森田　真也（MORITA, SHINYA）

筑紫女学園大学・文学部・教授

研究者番号：１０４１２６８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、民俗芸能の観光化について、グローバル化、再ローカル化の動きに着目し、それらの展開と特質について現地調査を行った。具体的には沖縄において旧盆に行われる民俗芸能「エイサー」を取り上げた。本研究において、エイサーが戦後沖縄の社会変化と連動していること、各種イベント等での演舞が地域の活性化につながっていること、観光への寄与、地域アイデンティティを共有する経緯となっていること、創作エイサー団体によるグローバルな展開とネットワーク形成が認められることがわかった。そして、地域を超えて広がりながらも地域社会と結び付こうとする民俗芸能の諸相、それらを活用した持続可能な観光の可能性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：　This study focused on and examined the globalization and re-localization of the drum dance “eisaa” and tourism inside and outside Okinawa (Hawai`i) through conducting fieldworks. Eisaa has been originally performed for the lunar Bon festival.
The study proved the followings; eisaa events have been influenced by the social changes in the post-war Okinawa; eisaa performances at various events have been linked to the economic and cultural revitalization of the local communities; eisaa events have promoted tourism; preforming eisaa have become the processes of creating and sharing local identities; and the new-style eisaa groups have expanded their social networks from Okinawa to Hawai`i and other places.  Thus, the study revealed that the various aspects of the drum dances and the possibility of the sustainable tourism with eisaa events in Okinawan and Hawai`i.

研究分野：民俗学・文化人類学

キーワード：民俗芸能　観光化　地域振興　グローバル化　ローカル化　沖縄　エイサー

１．研究開始当初の背景

これまで民俗芸能や祭礼は、地域社会に内在するもので、神や仏、先祖のために行われる真正な存在として民俗学者、芸能研究者によって研究されてきた。一方、それに対して観光客は民俗芸能を、外部から観光の素材として消費してきた。共に民俗芸能を「地域」、「伝統」と結び付けて解釈するものであるが、後者は急速かつ広域に広がる経済現象でもあり、観光関連業者、マスメディアと深く関わりを持ってきた。特に近年では、その経済効果に多大な関心が寄せられ、行政主体による民俗芸能や祭礼の地域振興への活用が提唱されることが多くなった。

全国的に進行する民俗芸能の観光化に民俗学が対応するようになったのは、1990 年代以降である。現実を直視するなら、観光を排した民俗芸能や祭礼のあり方を想起するより、いかに観光客や観光現象と関わりを持つのか、あえて持たないのかを考えていく方が有益であろう。

旧暦の盆に先祖供養のために行われてきた沖縄の民俗芸能「エイサー」も地域や伝統、芸術性と結びつけられて捉えられてきたが、戦後のイベント化、観光活用について言及されることは少なかった〔森田 2015〕。また、新しいエイサー団体の創設や活動についても同様であり、同団体は「創作エイサー」と称され、二次的なものとされてきた。しかしながら、エイサー諸団体はイベントや観光と関わり、地域を超えて活動し、新たなつながりを生み出してきた〔城田 2000; 久万田 2011〕。

そこで本研究では、まず戦後沖縄の社会変化と観光化を概観しながら、エイサーのイベント化、観光化と変容について捉えていく。現地調査を通じて、地域の青年会や保存会のエイサー、新しいエイサー団体、観光の現場におけるエイサーと異なる性格のエイサーをみていき、それぞれの活動、イベントと観光への参与の特性、参加者の意識について捉えていく。そして、地域社会への影響、アイデンティティ、ネットワークとの関わりについて考えていく。

なお、本研究はエイサーの観光化という個別事例の考察だけではなく、戦後、沖縄社会のグローバルな変化、観光化にいかに地域社会が関わってきたのか、アイデンティティの創造、パフォーマンスのもたらすつながりという問いにもつながるものである。

以上、本研究は、民俗学・文化（観光）人類学の立場から、グローバル化、再ローカル化を念頭におき、戦後、民俗芸能がどのように観光と関わってきたのかについて、さらに観光を超えた可能性や課題を持つのかについてみていく。加えて、地域社会と民俗芸能や祭礼、つまり伝統文化を活用した持続可能な観光のあり方について現地調査を通して考えていきたい。

２．研究の意義と目的

本研究の第一の意義は、これまで地域社会の真正な伝統文化として捉えられてきた民俗芸能エイサーを、戦後の沖縄社会の変化と観光化といった視点で分析する点にある。本研究では、その経済的な効果だけでなく、全国的に進む伝統文化を活用した観光と地域社会の動態についてを研究の対象とする。

第二の意義は、民俗芸能の観光化を、人、物、金、情報等が迅速かつ大規模に移動するグローバル化だけでなく、同時に進むローカル化という、地域社会の人々の実践や意識を視野に入れた分析を行う点にある。グローバル化と同時に進行するローカル化について、社会人類学者の上杉富之は、「グローカリゼーション」という概念で捉えることを提唱している〔上杉 2009, 2014〕。グローバル化は世界を均質化するとともに、地域独自の影響をもたらす。観光経済や情報はグローバルに展開するが、地域社会はそれをそのまま享受するのではなく、相互作用から多様な展開を招くというのである。本研究においては、民俗芸能を通して、観光を基点に同時進行するグローバル化とローカル化の相互作用、及び緊張関係に注目し、観光と地域社会の今日的あり方を研究の射程とする。

そこで本研究においては、民俗芸能のイベント化、観光化について、グローバル化、再ローカル化の動きに着目して、その展開と特質、地域振興とアイデンティティ、ネットワーク形成といった可能性と課題について解明することを目的としている。具体的には、沖縄の民俗芸能エイサーと観光の関わりを取り上げる。

本来エイサーは、各地の青年会を母体に地域社会において伝承されてきたものである。しかしながら、昨今、旧盆以外にも様々な観光の現場においても演じられるようになっている。また、沖縄県内だけでなく、県外、海外においても各種イベントが開かれ、新しいエイサー団体が結成され、活動している。さらに、観光関連施設においてもエイサーが随時演じられ、土産物等においてもエイサーをモチーフとした商品が販売されている。地域社会によって維持されてきた民俗芸能が、観光を媒介にしながら、特定の地域を超えて展開しているのである。今日、エイサーは、躍動感と活力があり、伝統的な文化や歴史を持つ沖縄を象徴するパフォーマンスとして人気をはくしている。

本研究では、第一にエイサーが地域社会を超えながら観光に利用されるようになった経緯について、沖縄社会の変化、観光化、といった視点を加えて考察する。第二に拡大化するエイサーを地域社会の人々がどのように自己実践として捉えているのかをみることで、地域振興とアイデンティティとの関わりについて考察する。第三に地域社会を超えたエイサー諸団体の活動、イベントや観光との関わりから、新たな人と人のつながり、ネ

ットワーク形成について考察する。
　このように本研究では、民俗芸能がイベントや観光と関係しながらグローバル化していく過程と新たな展開について、そしてグローバル化と同時進行する再ローカル化について考察の対象とする。さらに、地域社会と民俗芸能を活用した観光のあり方について考察していく。

３．研究の方法

　本研究においては、民俗芸能エイサーと観光の関わりをグローバル化、再ローカル化をキーワードにして、現地調査から読み解いていく。特にエイサーに関わる人たちがどのような活動をしており、どのような意識を持っているかに注目する。そのため、図書館、行政機関等において観光化の過程、現状に関する文献他の資料収集と分析だけでなく、調査地として選定した、主として沖縄本島中部、及び沖縄からの移民先であるハワイにおいてフィールドワークを行った。
　研究代表者・森田真也は、戦後沖縄の社会変化、エイサーの観光化、地域振興との関わりとアイデンティティ形成について研究を進めた。具体的には、青年会や保存会の演じてきたエイサー、イベントと観光との関わり、活動の拡大、地域へ再帰する意識について現地調査を行った。そして、観光の問題だけでなく、民俗芸能のグローバル化、並行して進む再ローカル化というグローカル現象の理論的検討を行い、観光と伝統文化、地域社会のあり方について考察を進めた。
　分担者・城田愛は、戦後沖縄の社会変化、イベント参加とエイサーの変容と発展について、新なつながりについての研究を進めた。具体的には、新しいエイサー団体、観光施設やホテルでのエイサーの演舞、イベントの現地調査を通して、観光化によるパフォーマンスの変容、その特質についての現地調査を行った。そして、イベント参加や観光を介した新たなパフォーマンスの発展、ネットワーク形成について考察を進めた。
　なお、上記研究課題を遂行するにあたり、現地調査を完全に分けるのではなく、共同で沖縄、及びハワイでの参与観察とインタビュー、資料取集等を適時行い、事例把握や問題点を共有した。

調査日程
2015 年度（一年目）
第 1 回調査、2015 年 8 月 23～30 日（恩納村、読谷村、嘉手納町、沖縄市、うるま市、那覇市等）。沖縄市内、嘉手納町内、うるま市内の青年会（保存会）エイサー、「嘉手納町エイサーまつり」、「琉球村」、ホテルエイサーの参与観察。千原エイサー保存会、沖縄市役所、「エイサー家」、「琉球村」、ホテル、博物館他でインタビュー調査。沖縄県立図書館。
第 2 回調査、2016 年 2 月 19～24 日（恩納村、嘉手納町、沖縄市、うるま市、那覇市等）。ホテルエイサーの参与観察。千原エイサー保存会、沖縄市役所、「エイサー家」、沖縄市青年団協議会、ホテル、博物館他でインタビュー調査。沖縄県立図書館。

2016 年度（二年目）
第 3 回調査、2016 年 8 月 14～22 日（読谷村、嘉手納町、沖縄市、うるま市、北谷町、那覇市等）。沖縄市内、嘉手納町内、うるま市内の青年会（保存会）エイサー、「沖縄青年ふるさとエイサーまつり」、「平敷屋青年エイサーの夕べ」、「たかはなり・島あしび」、創作エイサーの演舞の参与観察。千原エイサー保存会、平敷屋エイサー保存会、「むら咲むら」、「エイサー家」、博物館他でインタビュー調査。沖縄県立図書館。
第 4 回調査、2016 年 10 月 25 日～11 月 1 日（金武町、宜野座村、うるま市、那覇市等）。「世界のウチナーンチュ大会」、「世界エイサー大会」の参与観察。赤野青年会他でインタビュー調査。沖縄県立博物館。
第 5 回調査、2017 年 2 月 18～25 日（恩納村、沖縄市、うるま市、那覇市、南城市等）。「おきなわワールド玉泉洞王国村」、ホテル体験エイサーの参与観察。「エイサー団真南風」、「琉球國祭り太鼓」、那覇市国際通り商店街振興組合連合会、沖縄県青年団協議会、ホテル他でインタビュー調査。国立劇場おきなわ、沖縄県立図書館。

2017 年度（三年目）
第 6 回調査、2017 年 4 月 21～24 日（うるま市）。「ホワイトビーチ・フェスティバル」の参与観察。平敷屋エイサー保存会でインタビュー調査。
第 7 回調査、2017 年 4 月 29 日（大分県中津市）。「琉球國祭り太鼓まつり in 中津」の参与観察、インタビュー調査。
第 8 回調査、2017 年 8 月 30 日～9 月 11 日（ハワイ州：アメリカ合衆国）。「ハワイ・オキナワン・フェスティバル」等の参与観察。ハワイ沖縄センター、ハワイ日本文化センター、ハワイ・プランテーション・ビレッジ他でインタビュー調査。
第 9 回調査、2018 年 2 月 18～26 日（恩納村、読谷村、嘉手納町、沖縄市、うるま市、那覇市等）。創作エイサーの演舞の参与観察。千原エイサー保存会、「エイサー家」、うるま市役所、沖縄県立芸術大学、「琉球國祭り太鼓」、ホテル、博物館他でインタビュー調査。沖縄県立図書館、沖縄県公文書館。

４．研究成果

　初年度の調査研究の重点課題は、沖縄の戦後史、社会変化、観光化について、現地調査を踏まえて整理すること、イベント、観光化とエイサーの関わりである。具体的には、嘉手納町、沖縄市、うるま市等のフィールドワ

ーク（参与観察、インタビュー）を行った。森田が主として観光化、副として戦後史との関わり、城田が主として戦後史、副として観光化との関わりについて、エイサー保存会、青年会、市役所、観光関連施設、ホテル等においてインタビュー、地域の旧盆での演舞、「嘉手納町エイサーまつり」等のイベント、観光関連施設、ホテルでの演舞の参与観察、撮影と記録を行った。また、博物館において、見学、担当者へのインタビューも行った。あわせて、関連資料や文献の収集を行い、基礎的研究を進めた。

二年目の重点課題は、エイサーの観光化、地域振興とアイデンティティの関わり、ネットワーク形成についてである。具体的には、嘉手納町、沖縄市、うるま市、読谷村、北谷町、那覇市等のフィールドワークを行った。森田が主として観光化と地域振興、アイデンティティとの関わり、副として新しいエイサー団体について、城田が主として新しいエイサー団体とネットワーク形成、副として観光化、地域振興とアイデンティティの関わりについて、エイサー保存会、青年会、観光関連施設、エイサー団体、経済関連団体、ホテル等においてインタビュー、地域の旧盆での演舞、「沖縄青年ふるさとエイサーまつり」等のイベント、沖縄県主催の「世界のウチナーンチュ大会」、「世界エイサー大会」、ホテルにおける演舞の参与観察と記録を行った。あわせて、関連資料や文献の収集を行った。

三年目の重点課題は、エイサーを活用した地域振興や観光の在り方について、県内だけでなく県外、海外とのネットワーク形成についてである。主に森田が行政機関、経済団体等のエイサーによる地域振興や観光活用について、城田が新しいエイサー団体とネットワークについて、エイサー保存会、エイサー団体、市役所、ホテル等でインタビューを行った。そして、沖縄からの多くの移民が暮らすハワイの「ハワイ・オキナワン・フェスティバル」における演舞の参与観察、撮影と記録、インタビューを行った。

これまでの調査研究において、明らかになったのは、以下の三点に集約出来る。第一に戦後沖縄の社会変化と文化観光、エイサーの関わりである。沖縄観光の萌芽は、戦前から一部みられるが、それは限定的なものであった。戦後の沖縄はアメリカ統治下に入ったため、一般の日本本土の人々は訪れることが出来なかった。そのような状況下において、最初に沖縄を目指したのは戦没者の慰霊を目的とした、戦跡巡礼団であった。また、米軍基地が整備されるに従い、米軍関係者も増加した。民俗芸能エイサーの復興は、戦後の沖縄社会自身が求めたものである。そして、米軍は日本本土との切り離しを目論み、「琉球」の文化を奨励した。その後、各地の民俗芸能が復興し、「沖縄全島エイサーコンクール（現沖縄全島エイサーまつり）」等のイベントも開催されるようになった。あわせて、エイサーも外部からみられることを意識しはじめ、演舞も少しずつ変化していった。

しかしながら、沖縄文化が明確に観光と結びつくのは、1972 年の沖縄の施政権返還（本土復帰）以降である。1975 年の沖縄国際海洋博覧会の開催後、海の商品化が進む。そして、1990 年代の沖縄ブーム、観光化の進行、日本本土との関係性の変化といった流れの中で、沖縄の歴史と文化が観光の要素として注目されるようになる。こうしてエイサーも沖縄内部においても、また外部からも沖縄文化の象徴的位置付けにあるものとしてまなざされるようになっていった。

民俗芸能エイサーは、沖縄戦の破壊と混乱から地域社会の再構成に関わってきた。例えば、うるま市平敷屋は、戦後、米軍港のホワイトビーチ建設のため、集落の移転を余儀なくされつつも、エイサーを復興して基地との交流等をはかっている〔城田・森田 2018〕。民俗芸能は地域社会内部だけでなく、沖縄独自の米軍基地という特異な存在と関わりながら今日まである。そして、イベントへの参与を経て、エイサーをもとにした地域振興の新たな試み、沖縄の観光化と連動した観光活用も行われている〔森田 2015〕。民俗芸能エイサーは、戦後の沖縄の社会変化と関わりながら展開してきたのである。

第二に地域社会、地域振興とアイデンティティとエイサーの関わりである。エイサーは主に各地の青年会、もしくは保存会によるものである。エイサーは昨今、観光客に喜ばれるパフォーマンスであるが、旧盆、さらにはイベントの場面において沖縄の人々にも強い人気を保持してきた。エイサー関連のイベントは、観光客のニーズだけでなく、自己消費的側面を持っている。円滑なエイサーの実施は、安定的で強い絆を持つ地域を現わすものであり、その演舞は地域を盛り上げ、結束させるのにも寄与している。例えば、嘉手納町千原は、戦後、米軍の嘉手納飛行場に集落を接収された。しかしながら、千原郷友会は千原エイサー保存会を立ち上げ、地域の紐帯を維持している〔森田・城田 2017〕。エイサーの実践は戦後揺れ動く、地域のアイデンティティの再確認と強化にもつながっている。

このようなエイサーの観光への活用は、観光による経済振興と地域の活性化の可能性を持つものとして理解出来る。地域の人々、さらには観光客を呼ぶため、那覇市の国際通り商店街振興組合連合会主催の「一万人のエイサー踊り隊」のように各地でエイサーの名を冠したイベントが開催されるようになっており、「琉球村」のように恒常的にエイサーをみせる観光施設、リゾートホテルもある。また、沖縄市のように 2007 年に「エイサーのまち宣言」を行い、2018 年には「エイサー会館」（旧「エイサー家」）を立ち上げる等、行政的にエイサーを地域振興の核とするような試みもある。

ただし、ここで興味深いのは、エイサーに

よる地域振興の試みは、単なる行政や経済界の主導によるものではなく、各地の青年会がそれに関わっていることである。さらに言えば、そのような動きに呼応しながらも、青年会は地域に根差した活動を基本とする姿勢を崩していない。そしてイベントや観光、行政をつなぐものとして、エイサーの母体である各地の青年会を統括し、調整をはかる青年団協議会の存在がある。エイサーのイベント、観光活用において、地域の社会活動を担う青年会組織を統合するネットワークの存在は沖縄独自のものである。民俗芸能エイサーは、地域社会とつながりながら、こうして活動を広げてきているのである。

第三に新しいエイサー団体の創設と活動、ネットワークについてである。今日、エイサーを行うのは、地域の青年会、保存会だけではない。沖縄県内、県外、ハワイや北米・南米等の海外の移民先においてもエイサーが行われている。そこでは、新しいエイサー団体が結成されている。新しいエイサー団体の特徴は、地域、メンバーシップを限定しないこと、ジェンダーによる役割分担に寛容であること、演舞の時期、場所、機会に柔軟であること、演舞で使う楽曲や衣装、その内容についても新たなものを導入していることがあげられる。各種イベント、観光の現場にも登場し、分派したり、新規の団体も増えている。

最も古い団体は、1982 年、沖縄市で結成された「琉球國祭り太鼓（以下、祭り太鼓）」、1986 年、読谷村で結成された「残波大獅子太鼓」を母体とする「エイサー団真南風（以下、真南風）」である。祭り太鼓は、日本国内に 47 支部、ハワイ他海外に 6 カ国 28 支部を持ちながら、総勢 2500 名余りとグローバルな活動をする団体である（2017 年現在）。沖縄ポップスを中心に独自の振り付けを行っており、県内外で各種イベントに参加、マスメディアへの出演も多い。特筆すべきは、エイサーを介した、そのネットワークの広さ、大人数でのスペクタクルな演舞である。真南風は、恩納村のホテルで専属の演舞を行うようになり、1996 年より観光施設である「おきなわワールド玉泉洞王国村」において、毎日数回の演舞をしている。主に観光客を対象に、「獅子舞」、「アンガマ―」等の異なる民俗芸能を複合したアクロバティックな独自のパフォーマンスを展開している。

両者には、構成や演舞の性格に違いがあるが、従来のエイサーの要素を踏襲する部分と拡張する部分を持つということ、県内においては青年会のエイサーとは異なる存在として捉えられているが、特に県外からの人には、その派手で明確なパフォーマンスの評判は高いということがいえる。これら以外にも様々な新しいエイサー団体が結成され、各種イベント、ホテルや観光の現場等、活動域を広げ、ネットワークを拡大している。共通しているのは、従来のエイサーからのパフォーマンスの広がりを目指していること、そして、狭義の地域を超えた沖縄文化の象徴としてエイサーを捉えていることが指摘出来る。民俗芸能エイサーは、創作性を発揮しながら、新たな活動の広がりをみせているのである。

以上みてきたようにエイサーにはグローバルな展開が見られる。各地域の青年会において旧盆に演舞されていたものが、演じる時期、場所、機会を拡大化している。また、県内、県外、海外において新たな創作性の高いエイサー団体が増え、パフォーマンスの幅を広げ、これまで無かったネットワークを作り上げている。また、同時に地域へと再帰する再ローカル化の動きも見て取れる。青年会のエイサーは新しいエイサーとは異なり、各地域と密接な連関を保持し、地域の人々の紐帯を強め、地元意識を明確にする役割を担い続けている。一方、新しいエイサー団体は、各地域を超えた沖縄全体のシンボルとしてエイサーを捉え、沖縄という地域のアイコンになろうとして、より広域に活動している。そして、地域の人々がエイサーを自分たちのものとして肯定的に捉える、演舞する人々がある種の感動や達成感を見出す姿、さらには観光客が一部それらを共有する観光の在り方が伺えるのである。

本調査研究において、エイサーが戦後沖縄の社会変化と連動していること、旧盆だけでなく各種イベント等での演舞が地域の活性化につながっていること、観光への寄与、地域アイデンティティを共有する経緯となっていること、新しいエイサー団体による創作とネットワーク形成が認められることがわかった。なお、今後の課題として、実践的観光活用の検証、マスメディアとの関わりについて研究を十分に深められなかったという点をあげることが出来る。

以上のように現代沖縄のエイサーの展開からは、地域を超えて広がりながらも地域社会と結び付こうとする地に足がついた民俗芸能の諸相、それらを活用した地域主体の持続可能な観光の可能性が見出せる。

＜引用文献＞

上杉富之　2009「『グローカル研究』の構築に向けて―共振するグロ―バリゼーションとローカリゼーションの再対象化―」『日本常民文化紀要』第 27 輯、pp.43-75

上杉富之　2014「グローバル研究を超えて―グローカル研究の構想と今日的意義について―」『グローカル研究』第１号、pp.1-20

久万田晋　2011『沖縄の民俗芸能論―神祭り、臼太鼓からエイサーまで―』ボーダーインク

城田　愛　2000「踊り繋がる人びと―ハワイにおけるオキナワン・エイサーの舞台から―」福井勝義編『近所づきあいの風景―つながりを再考する―（講座人間と環境第 8 巻）』昭和堂、pp.58-89

城田　愛・森田真也　2018「オスプレイとエ

イサー―戦後沖縄における民俗芸能のひろがりと米軍基地―」『大分県立芸術文化短期大学紀要』第 56 巻、pp.63-90
森田真也　2015「地域を演出する」福田アジオ他編『はじめて学ぶ民俗学』ミネルヴァ書房、pp.61-72
森田真也・城田　愛　2017「フェンスをこえるエイサー―戦後沖縄における民俗芸能の復興と米軍基地―」『筑紫女学園大学 人間文化研究所年報』第 28 号、pp.1-14

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）
① 城田　愛、森田　真也（共著）
「オスプレイとエイサー―戦後沖縄における民俗芸能のひろがりと米軍基地―」『大分県立芸術文化短期大学紀要』第 56 巻、2018、pp.63-90（査読無）
② 森田　真也、城田　愛（共著）
「フェンスをこえるエイサー―戦後沖縄における民俗芸能の復興と米軍基地―」『筑紫女学園大学 人間文化研究所年報』第 28 号、2017、pp.1-14（査読無）
③ 森田　真也
「帝国日本下における人の移動と神の勧請―沖縄石垣島の台湾系華僑・華人の『土地公祭』をめぐって―」『人文學報』第 108 號（京都大学人文科学研究所）、2015、pp.35-47（査読無）

〔学会発表〕（計 2 件）
① 城田　愛
「ハワイ移民と沖縄を架橋する『うた』と『ぶた』―二世女性の個人史にみる沖縄戦救済運動の舞台―」日本文化人類学会 第 52 回研究大会（弘前大学）、2018 年 6 月 2 日（予定）
② 森田　真也
「占領下におけるに『文化』の描き方/読み方―戦後沖縄における米軍広報誌の内容と役割―」日本民俗学会 第 67 回年会（関西学院大学）、2015 年 10 月 11 日

〔図書〕（計 5 件）
① 森田　真也
「国境を生きる―沖縄石垣島の台湾系華僑・華人の越境経験と組織形成―」上水流久彦・西村一之・村上和弘編『境域の人類学―八重山・対馬にみる「越境」―』風響社、2017、pp.147-181
② 城田　愛
「ハワイ日系・沖縄系移民の家族が織りなす『物と物語』への文化人類学的アプローチ」、山崎敬一・やまだようこ・山崎晶子・池田佳子・小林亜子編『日本人と日系人の物語―会話分析・ナラティヴ・語られた歴史―』世織書房、2016、pp.94-123
③ 城田　愛
「『プリズン・フラ』にみる社会的排除と文化的包摂―先住ハワイアン系の刑務所入所者たちの舞台―」白水繁彦編『ハワイにおけるアイデンティティ表象―多文化社会の語り・踊り・祭り―』御茶の水書房、2015、pp.69-110
④ 森田　真也
「地域を演出する」福田アジオ他編『はじめて学ぶ民俗学』ミネルヴァ書房、2015、pp.61-72
⑤ 森田　真也
「占領という名の異文化接合―戦後沖縄における米軍の文化政策と琉米文化会館の活動―」田中雅一編『軍隊の文化人類学』風響社、2015、pp.139-175

〔産業財産権〕
無し

〔その他〕
ホームページ等
無し

６．研究組織

(1)研究代表者
森田　真也（MORITA, Shinya）
筑紫女学園大学・文学部・日本語・日本文学科・教授
研究者番号：10412686

(2)研究分担者
城田　愛（SHIROTA, Chika）
大分県立芸術文化短期大学・国際総合学科・准教授
研究者番号：80425389

(3)連携研究者
無し

(4)研究協力者
無し